様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　6 月 13 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008～2009
課題番号：20820026
研究課題名（和文）
復原された『夜の寝覚』と平安時代後期における政治状況の相関についての研究
研究課題名（英文）Restoration of “Yoru no nezame” and Research of correlation of political situation at “Yoru no nezame” and latter term of the Heian era

研究代表者
赤迫　照子　（AKASAKO　SHOUKO）
広島大学・図書館・助教
研究者番号：70452612

研究成果の概要（和文）：
（1）国宝「寝覚物語絵巻」享受関係等、多様な角度からの新資料捜索・調査と、（2）物語世界における政治構造、特に藤原摂関体制と平安時代後期の政治状況との相関に関する分析によって物語の展開を推定するという二つの方法を用いて、『夜の寝覚』欠巻部分の復原を試み、作品の全容解明と再評価を行った。また、『源氏物語』や『狭衣物語』における摂関体制との差異を明らかにし、『夜の寝覚』の特質を指摘した。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research is to restore “Yoru no nezame”, to clarify the whole content of this story, and to revalue. The two methods exist. One is a method of searching for material from various angles like the material etc. that relate to national treasure ″Nezame monogataril emaki ″.Another is a method of analyzing the relation between a political dispensation of “Yoru no nezame” by Fujiwarashi and a political situation at the latter of the Heian era, and presuming the development of the story. Moreover, the difference of the political dispensation of “Yoru no nezame” and “The Tale of Genji” and “The Tale of Sagoromo” was clarified, and the characteristic of “Yoru no nezame” was pointed out.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	520,000	156,000	676,000
2009 年度	490,000	147,000	637,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,010,000	303,000	1,313,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：日本文学、平安時代後期、夜の寝覚、寝覚物語絵巻、摂政、関白、源氏物語、御堂流

１．研究開始当初の背景

本研究「復原された『夜の寝覚』と平安時代後期における政治状況の相関についての研究」（研究代表者：赤迫照子）は、平成 19 年度に企画し、同年、広島大学女性研究者奨励賞を受賞、その助成によって基礎作業を行った。さらに「復原」に向けて新たな視点を加え、平成 20 年度、研究を開始した。

研究代表者赤迫照子は、これまで「『夜の寝覚』の石山の姫君―藤・撫子のイメージと『源氏物語』引用―」（『古代中世国文学』第 21 号、22-26 頁、平成 17 年）「『夜の寝覚』の始発と『源氏物語』―太政大臣出自考―」（『古代中世国文学』第 19 号、11-15 頁、平成 15 年）等において、『夜の寝覚』が『源氏物語』引用しつつも、自律的に物語世界を構築する様相を考察してきた。このように論考を積み重ねる内に、『源氏物語』の要素以外にも、平安時代中期～後期の政治的状況や実在の政治家のありように類似する箇所を見出してきた。この類似は、果たして何を意味するのか、それを考察するための前提として、そもそも『夜の寝覚』ではどのような政治状況が設定されているのかを解明する必要があった。

『夜の寝覚』の政治構造については、これまでほとんど着目されていない。『夜の寝覚』世界の政治状況を分析し、同時代の政治状況と照らし合わせる本研究の試みは、新たな着眼点であったといえる。

復原については、まずは従来よりも広い視野で『夜の寝覚』という文学作品を捉え直すことから始めた。近年、欠巻部分に相当すると思しき古筆切等が発見され、復原作業が進んでいる。本研究では、散逸部分の内容を直接伝える資料の出現を待つのではなく、『夜の寝覚』享受資料にまで捜索対象を大きく広げてみることにした。

注目したのは、国宝「寝覚物語絵巻」の伝来と享受である。「寝覚物語絵巻」は、末尾欠巻部分に相当する。『夜の寝覚』は『伊勢物語』や『源氏物語』とは異なり、後世、広く享受された作品ではない。写本も数少なく、江戸時代に出版もされていない。絵画化されたものも、「寝覚物語絵巻」しか確認されていない。果たして旧蔵者や模写をした絵師は、「寝覚物語絵巻」をどのように享受したのか。一体、どのような物語の何の場面の絵だとして捉え、鑑賞していたのか。享受の様相を積極的に探ることで、復原に繋がる手がかりを得られるのではないかと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、（１）末尾欠巻部分に相当する「寝覚物語絵巻」伝来と享受の調査を通して、復原の手がかりとなる新資料を捜索することと、（２）『夜の寝覚』世界の基盤をなす政治構造の分析によって、物語全容の解明と作品の再評価を目指すものである。

本研究によって『夜の寝覚』が同時代の政治状況をどのように取り込んで、物語のリアリティを自律的に構築しているかが明らかになれば、その成果は藤原道長以後、藤原頼通の時代の空気が、文学にどのように反映されているかを捉えるための端緒となる。

平安時代、藤原摂関体制は、皇統と幾重にも結びつくことによって保証されてきた。だが、頼通は天皇の外祖父の地位を得られず、次第に藤原摂関体制には揺らぎが生まれ始める。また、頼通は長い間実の男子に恵まれなかった。このように、頼通以後の摂関継承をめぐる問題が潜在した時代において、藤原摂関体制を設定し、藤原摂関家の栄華を描き出した『夜の寝覚』が創作された。このことをどのように捉えるべきかを考えるために、まずは『夜の寝覚』を〈藤原氏の物語〉として読むことを試みる。

政治は、物語の展開を支える主要な骨組みである。それが明らかになれば、物語の展開をある程度は推定可能であり、欠巻部分の内容も見えてくる。政治構造の分析は、「復原」においても有効な方法だといえる。

３．研究の方法

以下の３つの方法によって行った。

（１）資料収集と調査を実施し、復原のための材料を収集する。

（２）年立と系図を作成し、物語の全容を可能な限り可視化する。

（３）『夜の寝覚』政治関係の条と、古記録類・他文学作品の記事を照合、分析し、論文発表等を行う。

４．研究成果

研究の目的（１）…近年、古筆切等の新資料が発見されているが、本研究では従来とは別の角度から復原のための新資料を捜索した。

着目したのは「寝覚物語絵巻」の模写を行った江戸幕府御用絵師関係の史料、「寝覚物語絵巻」の旧蔵者である旧館林藩藩主秋元氏関係史料、大和文華館創設者である原三渓の伝記史料である。伝来にまつわる資料にまで視野を大きく広げ、『夜の寝覚』がどのように読まれてきたのか、その痕跡を収集し、データ入力をした。

「寝覚物語絵巻」を模写した江戸時代の絵

師住吉具慶・狩野春川院養信は、和学者から古典の教授も受けている。このようなことから、彼らはただ単に大和絵の技法を習得したのではなく、作品の内容も咀嚼し、有職故実を身につけようとしていたことがうかがえる。

秋元氏関係史料については、調査を進めるにつれて、近世初頭における絵巻授受の問題の一つとして「寝覚物語絵巻」の伝来を位置づける必要が出てきた。「寝覚物語絵巻」は後水尾天皇から下賜されたとされるが、下賜したのは後陽成天皇であったとする記録も存することが確認された。いずれが正しいのか、或いはいずれも正しくないのか、それを判断するための客観的な材料を見つけるまでに至っていない。また、下賜された背景についても、現時点では明らかにすることができていない。他の絵巻の授受について目を配りながら、「寝覚物語絵巻」伝来の謎にアプローチしていかなければならない。

原三渓関係史料の調査についても、近代の財界人による美術品蒐集や、その後から現代に至るまでの様相をも総体的に考察することになった。

このように、『夜の寝覚』及び「寝覚物語絵巻」の伝来を追跡調査していくと、近世期の物語享受研究や、美術史・文化史の問題にまで広がる。さらに多様な視点を設定しつつ、『夜の寝覚』伝来と享受の問題へと展開したいと考えている。

研究の目的（２）…まず、年立の再検討を行った。その際、改作本がどの程度まで原作本の欠巻部分推定資料として扱えるのかを確認するために、改作本と原作本を照合し、共通点と相違点を抽出した。

また、現時点では補完できる資料が発見されておらず、不明だと断言せざるを得ない原作本の箇所も確認した。これらはデータ入力し、一覧できるようにしている。その一覧からさらに、政治関係の条をリストアップした。

この作業の過程において発見した『夜の寝覚』と、『古事談』『栄華物語』『小右記』等の記事との類似点についても、リストアップを行った。

これらの類似が意味することについて考察した結果、『夜の寝覚』が御堂流による藤原摂関体制を強く意識して物語世界を構築しているのが明らかとなり、赤迫照子「『夜の寝覚』の摂関体制―「おほやけの御後見」の相対化と〈藤原氏の物語〉―」（横井孝・久下裕利編『平安後期物語の新研究―寝覚と浜松を考える―』、113－135、新典社、2009）として発表した。一世源氏を絶対者として描いた『源氏物語』との比較も行い、藤原摂関体制を基盤とする『夜の寝覚』の特質を指摘している。

『源氏物語』は、摂関体制の存在そのものを朧化し、光源氏を「おほやけの御後見」と繰り返し呼び続けることによって光源氏を絶対者に定位させ、一世源氏の政治支配という虚構を成立させた。『夜の寝覚』と同じく平安時代後期物語である『狭衣物語』は、一世源氏を関白として設定した。両作品はいずれも、同時代の現実である藤原摂関体制を真正面から描こうとはしなかったのである。

一方、『夜の寝覚』は九条流を下敷きに、藤原氏が摂関を継承していく様相をはっきりと描いている。特に、摂関家嫡流（大殿・男君）は御堂流に近似するように描かれている。例えば、大殿逝去後、大臣経験を重んじて関白を継承せず、長く内覧をつとめながら大臣経験を積み重ねる男君は、摂関職に固執せず、長年内覧の地位に留まって実務を取り仕切った道長の姿勢によく似ているのである。

このように、三人の関白（大殿・男君・老関白）と、『夜の寝覚』成立に近い時期の摂関との類似を検証したところ、三人の関白像に道隆・伊周・道長・頼通・教通・師実を直線的に投影したり、或いは各人物の持つ要素を反転し、複雑に重ね合わせながら人物造型を行っていることが明らかになった。さらにはその人物造型によって、摂関家嫡流（大殿・男君）が「嫡流」として揺るぎない存在で、正統であることを強調し、同時に傍流（老関白）の力量不足を点描し、「傍流」に過ぎない存在として定位させていくように物語が展開していることも明らかになった。これをふまえて、中間・末尾欠巻部分における男君・老関白の昇進状況を推定し、欠巻部分における政治状況についても解明を行った。

嫡流・傍流のせめぎ合いを描く『夜の寝覚』では、いずれにせよ、物語世界において藤原摂関体制は揺るぎないものである。『源氏物語』や『狭衣物語』のように、源氏一族が政治家として権力の中枢に入り込む余地はない。女主人公寝覚の女君の父源氏太政大臣は光源氏と同じく「おほやけの御後見」と呼ばれているが、藤原摂関に服従し、政治的野心を抑圧しながら生きる人物として造型されている。つまり、『夜の寝覚』は『源氏物語』の政治構造を十分意識した上で、『源氏物語』の「おほやけの御後見」の相対化を行っているのである。この点から、『夜の寝覚』は『源氏物語』を反転させた〈源氏の物語〉だといえる。

以上のように、『夜の寝覚』を〈心理小説〉として女主人公に沿って読む前に、まずは政治の物語、すなわち〈藤原氏の物語〉として捉え直して男主人公の側に沿って読んでみれば、『夜の寝覚』は摂関体制の存在自体を朧化した『源氏物語』の政治状況を、意識的に相対化していることが明らかになった。

このような物語の政治状況をふまえた上

で、今度は〈源氏の物語〉として『夜の寝覚』の文脈を追ってみると、寝覚の女君・石山の姫君が、藤原氏である三人の関白達から常に深い愛情を注がれ、奉仕された結果、源氏一族の皇統回帰が実現するように展開していると推定できる。寝覚の女君の兄達も、老関白や男君に目をかけられることによって、出世を果たす。摂関家嫡流は源氏腹の姫君（＝石山の姫君）を得ることによって引き続き皇統と結びつき、権力基盤を固めていくことが可能になり、源氏の方は藤原氏に絡みつくことによって栄華を獲得する。『夜の寝覚』は藤原摂関体制という同時代の現実を基盤としつつも、『源氏物語』や『狭衣物語』とは異なる方法で、源氏一族の栄華を描いた作品だといえよう。

次の段階として、頼通の時代において、このような物語が創作された背景（作者の問題も含む）を明らかにしていく。そのために、記録類や『栄華物語』等をさらに精査する作業が必要となってくる。もちろん、物語享受圏の問題にも注目したい。物語文学とは何か、『源氏物語』以後の物語とは一体何だったのか、という問題を具体的に明らかにしていくために、引き続き、同時代の政治状況との相関を視点としていく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）
赤迫照子「『夜の寝覚』の摂関体制―「おほやけの御後見」の相対化と〈藤原氏の物語〉―」（横井孝・久下裕利編『平安後期物語の新研究―寝覚と浜松を考える―』、113－135頁、新典社、2009）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/tokushu/collectionNavi.html

６．研究組織
(1)研究代表者
赤迫　照子（AKASAKO　SHOUKO）
広島大学・図書館・助教
研究者番号：70452612

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：